

## 《研究ノート》

### 田中智学著 『宗門之維新』 を読んで

古 河 良 皓

(現代宗教研究所研究員)

#### 一、はじめに

現宗研の研究例会では、昭和五十八年五月から翌年にかけて、およそ十回位に分けて、田中智学が明治三十四年に著わした『宗門之維新』を取り上げ、研究員が輪読し、あわせて今日の宗門的視野に立つて問題点を討議した。

ここに、『宗門之維新』の内容紹介や提起された宗門の問題点、また今日我々が考えるべき点などをまとめて、研究例会の報告とする。

本書『宗門之維新』は、田中智学が明治三十四年（一九〇二）三月、修善寺で執筆し、「妙宗」四月号から三回にわたって連載したものである。その後、篤志者の出資により一千部を刊行し、初版を日蓮宗当局者に配布したが、さしたる反響も見られず、第二版以降は、日蓮宗外の有識者七百余名に贈り、むしろ日蓮宗の僧侶よりも教団外の人々に強い影響を与えた。

この中で顕著な反応を寄せた者に、高山樗牛がいる。彼は本書の読後感を、彼の主宰する雑誌「太陽」へ書き送り、「近代宗教界の一大文字として賞讃」し、田中智学の指導を受けて入信、日蓮聖人の組織的研究に取り組んで日蓮主義を鼓吹したが、その功績は大きく、彼の友人、柿崎正治もまた影響を受けて『法華經の行者日蓮』を著わした。

さて、田中智学は、明治三年（一八七〇）、智境院日進を師として得度し、翌四年には飯高檀林に入り、その後日蓮宗大教院に入ったが、一年余で病気のため休学し、明治十二年には還俗してしまった。これ以後、在家仏教運動をおこし、明治十三年に蓮華会を結成、同十八年には立正安国会を設立し、機関誌や多くの講演・伝道によって日蓮主義を説いて活発な活動を展開し、大正三年、それまでの組織を拡大して国柱会を結成するに及んだ。

その間、明治三十四年に本書を著わして宗門改革を唱え、同年五月には、「本化撰折論」を講演して折伏主義の実義を明らかにした。続いて同三十七年には、『本化妙宗式目講義録』（のち『日蓮主義教学大観』と改題）をまとめて、彼の思想は本化妙宗教学として組織大成されたのである。

一方、明治維新以降、我が国には近代化・合理化の波が押し寄せ、それに対して宗教界や仏教界では全く対応しきれていなかった。日蓮宗も、そうした近代化の流れに宗門としてどう対応すべきかが、大きな課題であった。当時の日蓮宗は、幕末の宗学者優陀那日輝の門下によって支えられていたと言えるが、その高弟の一人である新居日薩が大教院の院長を務めていた。彼は各宗と提携して、廃仏毀釈の中から教団を立て直し、宗門護持復興の方向を打ち出していた。

そのような状況の中で、日蓮聖人の教義は終始折伏に一貫しており、破邪顕正の旗幟を鮮明にすべきであるという考えを持った田中智学は、日輝の授受的気風を継承する宗門に反発を示し、そのあり方に疑問を抱いて還俗し、折伏の精神に立つて時代を切り拓いていこうと考え、在家運動を始めたものと見ることができる。

このように明治維新を境として、日蓮教団もまた大きな歴史の曲り角にあつて試練に立たされた。そうした歴史的背景を背負つた日蓮教団の実情を前にして、本書は、それまでの立正安国会の運動の理念を集成し、その主張を総まとめにした宗門改革の見取り図として、田中智学が世に問うたものと言ふことができよう。

## 二、本書の内容紹介

さて、ここで『宗門之維新』の内容について簡単に紹介していくことにする。この『宗門之維新』は、序論（序分）、総論（正宗分の上）、そして別論（正宗分の下）と附録（妙宗未来年表・流通）からなつてゐる。

その内容を一言で言えば、日蓮主義を宣揚して宗門の改革を訴え、日蓮主義をもつて世界の統一を唱え、あわせて当時の日蓮宗々門の現状批判を述べたものと言へる。ここでは以下、序論と総論を中心にその内容を見ていくことにする。

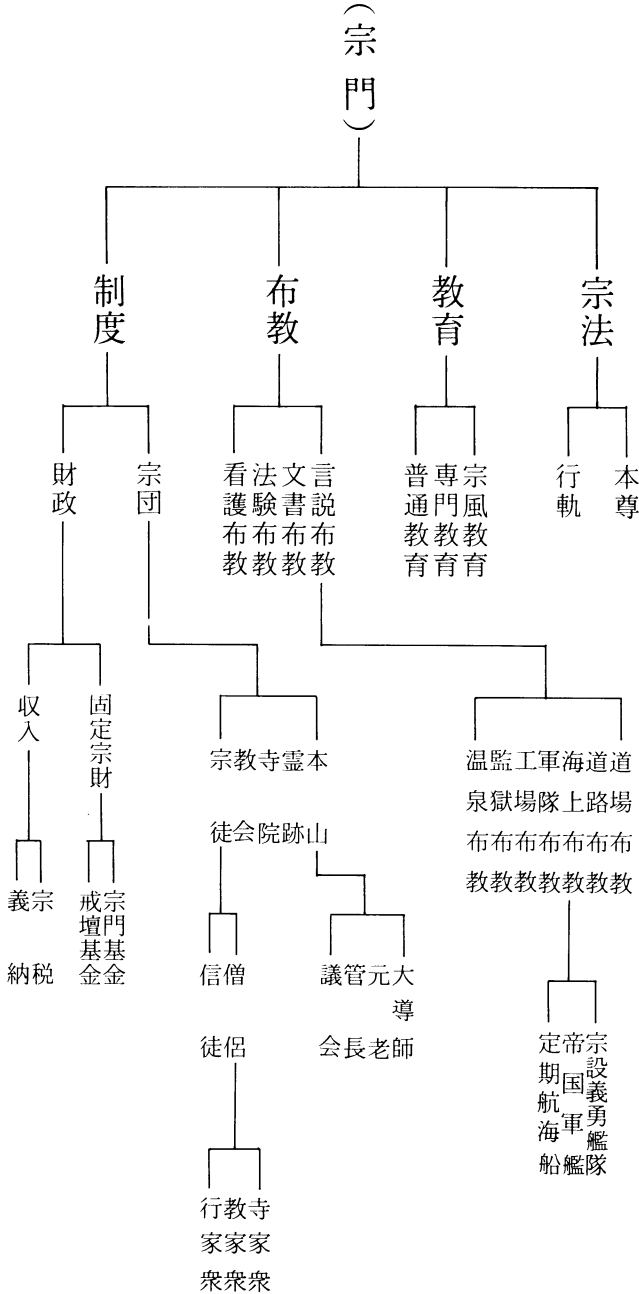
### （一）序論について

序論では、田中智学が唱えたこの宗門改革の意見は、決して一朝一夕に考え放言するものではなく、立正安国會を結成した頃から、過去二十年にわたつてその活動を通して考へてきた宿案であることを明らかにしている。そしてまず、本化の妙宗についての定義が示されている。

「それ本化の妙宗は、宗門のための宗門にあらずして、天下国家のための宗門なり、すなわち日本国家のまさに護持すべき宗旨にして、また未来における宇内人類の必然同帰すべき、一大事因縁の至法なり」と捉へて、日蓮聖人の宗教は本化の妙宗であり、日蓮聖人はこの一大事因縁を宣布するために日本国に垂化なされた」と領解している。

しかしそれに対して宗門の実情を見れば、数百年來種々の悪事情のために全くその本分を亡失してしまい、速やか

に改造の一事を成しとげねばならないにも拘らず、いたずらに姑息的教育や姑息的布教を行なうだけであって、しかも教義は雑乱してその真意を失ない、制度は時世の進歩に遅れてしまっていると指摘して、当時の宗門の有り様を厳しく批判している。



そうした宗門衰頹の第一原因は、信仰の衰減にほかならず、宗門改造を実施するにあたっては、まず「純にして淨き信仰心の回復」こそ、根本先決の問題であると訴えている。その清新活気の信仰とは、「不惜身命の心地」であつて、そうした不惜身命の信仰心の回復こそ、宗門改造に臨んでの重要問題であり、その上で宗門改造の方策とその実行とを提唱している。田中智学の描いた改革の概要図は、前記の如くである。

## (二) 総論について

次に、総論（正宗分の上）に入つては、総合的に改革の意義とその精神、および具体的な改革論の内容を詳述している。まず改革の判義を立てて、その所判としては「宗法」「制度」「教育」「布教」の四大綱を挙げ、能判としては「侵略的」「復古的」「進歩的」の三大綱を挙げている。

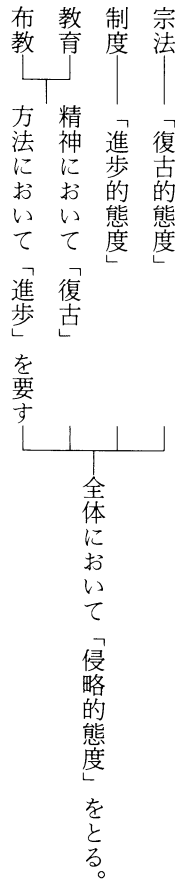
所判における四大綱については、先の概要図を見ても分かるように、「宗法」においては、本尊の統一と行軌の統一が主張され、「制度」においては、本山・寺院・宗門の首領・僧侶・信徒・財政等にわたつて論じ、「教育」については、宗風教育・専門教育・普通教育の三に分け、「布教」においては、言説布教・文書布教・法験布教・看護布教にわたり、中でも言説布教は更に細分化して考えている。

そしてこれらの四大綱を、「侵略的」「復古的」「進歩的」という能判の三大綱に組み合わせて解説し、この改革論の大綱は、「宗法」においては「復古的態度」をとり、「制度」においては「進歩的態度」をとり、全体においては、退嬰主義を破して「侵略的態度」をとるものとすると規定している。

特に、ここに言う「侵略的態度」とは、「宗教および世間もろもろの邪思惟邪建立を破して、本仏の妙道実智たる法華經能詮所詮の理教をもつて、人類の思想と目的とを統一する『願業』これなり」ということであり、しかも「純にして正しき『宗是』は折伏主義ならざるべからず、すなわち『侵略的態度』ならざるべからず、これ本宗の先天的宗

是なり」と述べて、本宗の宗是は侵略的態度、すなわち折伏主義にあることを明示し、改革の根本精神もこの「侵略的意義」にあると主張している。

「教育」や「布教」についても、それぞれ精神においては「復古」を要し、方法においては「進歩」を要すと述べており、これらをわかりやすく示してみると、次の様になろう。



総論では更に、制度や布教・教育についての具体的な改革案を提示している。制度の改革について見れば、本山台本論を説いて本山制の改革を訴え、身延山を中心とする組織の体系付けを試みており、また宗団の根本改造と称して信徒の分限（位地位・資格）を規定し、「宗門戸籍」の設定等を唱えている。

中でも本宗信徒の分限を示してみると、(1)本尊は統一して本山より付与のもの以外、勧請しない、(2)修行の規範を一定して、これを守る、(3)宗税の上納は家別と人頭の二種とする、(4)本尊拝受・法号授与・納骨の三件は、必ず本山の允許を受け、その浄謝を宗納する、というようなものである。

更に僧侶の役割・資格に関して、布教伝道と寺院護持の区別を設けて、前者の内て学教の者を教家、行法の者を行家と呼称し、後者を寺家と称して「僧別分班」を唱えており、また「今のいわゆる僧は古のいわゆる優婆塞なり」と述べて、末法の時代における僧侶はすでに出家者としての資格を失っており、故に優婆塞の立場として考えるならば、当時問題となった妻帯についても問題は生じないとして妻帯制度を是としている。それによって子孫が得られるのだ

から、門族護持、寺院の良図のためにも、住職の世襲をすすめる世襲住職論を主張している。

また布教の面でも、「軍艦を造りて仏事を行ずるは、安国論の密契、『涅槃經』の洪範なり」と述べて、海上道場の構想等を掲げ、教育の面でも、男子は本山の相当学院に、女子は宗立優婆夷林に入学させて、宗風教育を受けさせ、法器宗材を育成することを図り、他に宗有財産の建立、「本山鉄道」の設置、あるいは「海外宗教拓殖」を開始して、海外伝道の基礎を作り上げること等、数々の具体的な改革案を提示している。

以上、『宗門之維新』の序論と総論について、その内容を要約して紹介してきたが、ご覧の様に田中智字は、本書において、日蓮聖人の立てられた宗教を「本化の妙宗」と捉え、「復古」と「進歩」との両極の調和を見ながら、折伏的、侵略的に布教することに主眼を置き、「宗法」「制度」「教育」「布教」の全般にわたって、宗門改革の具体的な提案をなしているのである。

次いで、別論（正宗分の下）においては、この改革案を更に法義と制度にわたって細目に分けて具体的に詳述し、本尊・修行・布教・宗団・教育などの統一と、勧請の整齐・制度・組織の整理・改革などを唱えており、あわせて改造計画の実施順序を提示している。

最後に、流通分として、「妙宗未来年表」を表わし、『宗門之維新』を実行して十期五十年にわたる壮大な宗門改革の未来図を描いているのである。

### （三）日蓮主義による世界の統一について

本書には、宗門に対する改革論の延長線にありながら、別に日蓮主義による日本と世界の統一を提唱している部分があるので、そうした一面を、本文を引用して触れておこう。

田中智字は、「侵略的態度」の項の中で、「人類を統一するは、聖的事業のもつとも大なるものなり」と認識し、「宇

内万邦靈的統一軍」なるものについて述べている。

聖祖は、正しく世界統一軍の大元帥なり、大日本帝国は正しくその大本營なり、日本国民はその天兵なり、本化妙宗の学者教家はその将校士官なり、事観高妙の学見主張はその宣戰狀なり、折伏立教の大節は、その作戦計画なり、信仰は氣節なり、法門は軍糧なり、かくのごとくにして宇内万邦靈的統一軍の組織は成画せられたり：(中略)：日本国は正しく宇内を靈的に統一すべき天職を有す：(後略)：

また「内乱の鎮定」の項には、宇内統一軍の出征に先立つて、仏教界の謗法邪見を破折することを述べ、「法華折伏」の項では、

寺院の門石を見ずや、その「一天四海皆帰妙法」「閻浮提内広令流布」の文字は、日夕出入の縊し素そに「侵略」を号令するなり：(中略)：侵略的に信仰せよ、侵略的に学べよ、侵略的に説けよ、侵略的に書けよ、朝々夕々造次ぞうじ顛てん沛ばいも侵略的意氣を充たせよ：(後略)：

と記されており、「ただ侵略のために祈れよ、侵略のために死せんと祈れよ」と、侵略的姿勢の徹底を語氣強く繰り返し訴え、宇内万邦靈的統一軍を呼びかけて、日蓮主義による世界の統一を提唱している。

右のような侵略的態度や、宇内万邦靈的統一軍という用語は、誤解を招きやすいが、意味するところは、いわば破邪顕正であり、一天四海皆帰妙法、立正安国の祖願を折伏的に実現していくことと理解でき、「靈的」という表現からも分かるように、現実には軍隊を組織して他国を軍事的に侵略するというような意味ではない。すなわち、折伏的に日蓮主義を内外に広め、妙法の教えに帰依せしめて、教法の上で世界を統一していこうという、堅固な日蓮主義信仰の表現であると理解できよう。

ところで、こうした理解と異にした見解も見られるので、紹介しておこう。例えば、戸頃重基氏は、「いうまでもな



く侵略の為に祈るといふことは、帝国日本と皇室のために祈ることでもある。…(中略)…これが、明治軍国主義の宗教的な受け売りでなくて何であろうか。宗教的な幻想のなかに陰影を刻みこんだ帝国主義の現実的なプロパガンダでなくて何であろうか」(『日蓮教学の思想史的研究』三三五頁)と述べているが、ここではその是非はにおいて紹介するだけに留めておくこととする。

但し、侵略的態度と関連して、「海上道場」の項で田中智学が描いている武装商船の構想は、今日見過ごせない重大な問題であるが、これについては後に譲ることにする。

### 三、田中智学が提起した宗門の問題

さて、以上の様に『宗門之維新』の内容を要約して紹介してきたが、ここで前節と多少重複することになるが、本書の中で田中智学が実に鋭い目をもって提起している宗門の問題点を抜き取り、整理してみることにする。それらは主に、当時の宗門の現状批判に見られる数々の指摘から窮うことができよう。

まず序論について言えば、宗門衰頹の第一原因は信仰の衰滅にあるとした指摘は、すでに見てきたところであるが、「今日の宗門、内は祖師の本旨を亡ぼし、外は時世の開明におくれ、ただ喘々せんぜんとして伽藍の氣息を迷信界の一隅に持つのみ」と述べて、日蓮聖人の教義の本旨を失い、時代の進歩に遅れた宗門のあり方に対し、これが根本的な問題であると鋭い批判を下している。

総論では、宗門は『侵略的宗門』なることを忘却して、一日の安をも貪らんとするは、宗門の精神をころすのみならず、宗門をして天下無用の物たらしむるなり」と述べ、「立正安国の主義も、観心本尊の実義もことごとく、『本化的大義名分論』の能判より出たり」として、侵略的姿勢をとらない宗門を批判し、宗門の大義と名分とが、明かされ

ていない実情を指摘している。

ところで田中智学は、本書を著わした同じ明治三十四年の五月には、「本化撰折論」を講演して撰受と折伏について論じている。その中で、安土宗論以降、近世日蓮教学が他宗教に対して共存的な態度に立脚しているのに対し、日蓮聖人の根本精神に立ち返り、日蓮主義が「撰受的に行用する仏教」でなく、「折伏的に行用する仏教」であることを明らかにして、教団革新の教学的背景を折伏主義に求めることを主張している。

更に宗門の現勢は、厳格な意義においてその宗旨は滅亡してしまっており、僧侶や寺院、檀林や学者、布教や信徒はあっても、宗旨はなしと断言し、当時の宗門は法類や先師のための宗門ではあっても、祖師の宗門ではないことを嘆いているのである。

このような宗門全体にわたる問題提起の中には、今日の宗門に対してもそのまま通じる批判もあるように思われる。次いで、やはり大きな問題として、御本尊や修行行軌をはじめとした宗門の雑乱の問題を指摘している。それは、宗門は教法や修行においても、教学や弘通においても衰乱の極に達している（「改革の機運」と述べ、更に「本尊勧請の雑多なる、修行行軌の区々なる、これみなその淵源、法義相承解釈の区々にして、統一なかりしよりきたる」（「復古と進歩」とあり、「外護侍衛の神を崇むること、祖師よりも尊く、本尊に種々の新勧請を杜撰妄列し、誦経礼讚に重きを置きて、唱題を軽んずるの現象は如何」（「大義名分の祖猷」と述べている中に見られるものである）。

また、寺院や僧侶のあり方に対しても問題を挙げており、「像法的寺塔濫造は如何、小乗的円顛えんねん（ゆ僧侶）は如何、常説法教化の殿堂は、常に葬祭によりて賑えども、未だ信徒の結婚式を監修せるを聞かず」（「復古と進歩」と言つて、寺院のあり方を批判し、「今の宗門は、法義を中心とせず、寺院を中心として存在す、…（中略）…寺院を護持するの僧ありて、法義を護持するの僧なし、寺院に臨める管長ありて、法義を主る管長なし…（後略）…」（「宗門の版図、信

徒の入籍」と述べて、法義を護持する僧侶のいないことを嘆いている。

布教に關しても、「…(前略)…公開の演説、および道路演説もつとも必要なり、今の布教において、宗風の感化なく、かえつて新を趁おい古を失するの弊を青年者の演説に見、清新の意気なく、古弊の病あるを老年者の旧式説法に見る」(「精神の復古、方式の進歩」と述べて批判しているが、これらの指摘は現代に通じるものがあり、我々にとつても身につまされる思いがする。

更に信徒に対しても厳しく批判の目を向けており、「今の日蓮宗のいわゆる信徒なるものは、由来愚妄の宗教的動作に慣れて、毫も祖業宗風のなんたるかを知らず、太鼓と御札のほか、ただわずかに唵々たる伽藍的信仰の小氣息あるのみ」(「宗風の感化」として、信徒の姿勢もまた正すべきであることを主張している。

以上、田中智字が指摘した主な問題を列記してきたが、これらの他にも当時の身延山をはじめとして本山をめぐる本山制の問題、あるいは僧侶の役割分化の問題(僧別分班)、海上布教、宗門財政の問題など、当時の宗門の制度を中心に、幾多の問題を提起している。今、これらをもう一度整理してまとめてみると、次の如くである。

- ① 僧俗の信仰心の衰減
- ② 日蓮聖人の教義の本分妄失——宗旨の滅亡、大義名分の喪失
- ③ 侵略的態度・法華折伏主義(宗是)の欠如
- ④ 御本尊はじめ教義、行軌などの雜乱、不統一
- ⑤ 時代の進歩に遅れ、適應していない宗門のあり方
- ⑥ 本山・寺院・僧侶・信徒のあり方や、宗門の制度上、布教における諸問題など

これら右に挙げた諸問題の中には、今日の宗門にとつても考えねばならない問題も、少なからずあるうが、明治維

新から三十余年、近代化が進む社会の中で、様々な問題をかかえた当時の日蓮宗門の実情を目のあたりにして、田中智学は幾多の問題点を提起して、宗門の改革を呼びかけたのである。

#### 四、我々から見た本書の問題点

前節では、田中智学が『宗門之維新』の中で提起した問題点を見てきたが、ここでは逆に本書を読んでみて、我々の側から見た問題点を挙げてみたい。但し、本書を学習する中で、研究員の間でも本書に対する評価や受けとめ方には相違が見られたので、研究例会の成果を十分に汲み上げてここに記すことは困難であり、また独断的になりがちだが、試みに問題と思われる点を幾つか取り上げてみる。

##### ① 「侵略的態度」の用語について

この用語の意味するところは先に触れてきたが、意味とは別に用語のもつイメージはさすがに時代の隔たりを感じさせる。本書が執筆された明治三十四年頃は、日清戦争（同二十七八年）と日露戦争（同三十七八年）の中間にあたる。そうした歴史的状况の中では、こうした表現は一般にも抵抗なく受け入れられたのか、あるいはこうした表現の方が、法華経折伏主義を言い表わすのに適切と考えたのか、疑問である。現代では、「侵略的」という言葉は、聞いただけで戦争や軍国主義のイメージを思い起こさせ、先に紹介した戸頃氏の見解もあるように、誤解や問題を招きやすいと言えるだろう。

##### ② 御本尊の統一と本山付与の問題

この問題については、本書の別論の第一「本尊の統一」の項をまず示そう。そこには、『本尊』の雑乱は、明らかに宗旨伝持の不整束を示す：（中略）…而して之を一定するは、…（中略）…『文字図頭の大曼荼羅』に若くはなし、

就中、その『本尊式』は、文永十年七月八日佐渡始頭正式の御本尊に限るべし。寺院及び在家すべて純一同式たるべし、唯之を本山より受けて、決して自ら造るを許さず」と明記されている。

ここで問題となるのは、次の三点である。(一)統一するにあたっては、文字図頭の曼茶羅のみとある点、(二)その本尊式は、文永十年七月八日の佐渡始頭の御曼茶羅に限定している点、(三)御本尊は、本山より受けて自ら図頭することを許さない点、である。

もともと御本尊を統一すべきかどうかが大問題ではあるが、まず、(一)の点は、文字曼茶羅に限定するという点である。確かに本宗では御本尊の勸請形式、形態については、過去幾度か論議を呼んできたが、未だに確固たる結論は出ていないし、全国の寺院の御宝前を拝しても一定とは言えない。しかしこれをすべて文字曼茶羅のみと決定するに於いての是非を問うには、教学の上からも、信仰面からも検討すべき問題が多々あると思われる。

次に、(二)の本尊式の限定について述べると、今日宗祖の御真筆の御曼茶羅は百二十三幅伝えられているが、その図頭の形式には不同があることは周知のことである。それを佐渡始頭の形式に限定するとするならば、御真筆でありながら、幾分異った勸請形式の他の御曼茶羅は、どうなってしまうのか。御本尊と呼べないのだろうか……。もとより御本尊の勸請形式は、宗祖の本尊観に則って正しく表現されているかどうか、その中身がまず大事であり、形式上のことは二次的な問題ではなからうか。

(三)の御本尊の本山付与に関しても、かかる意味での統一には賛成しかねるので、本山で付与するにしても、如何なる御本尊を付与するかという問題も生じ、また自ら図頭することを許さないと云っても、今日誰れが認めたとしても、いわゆる御曼茶羅そのものには御本尊としての意義と、宗教的権威や価値は存するのであり、統一して本山より付与するからという理由だけで、各人の図頭が許されないとするには、無理があると思うのである。

しかし、これら御本尊に関する問題は誠に重大であり、田中智学の指摘にはその考え方の上で耳を傾ける点もあるようだし、雑乱勸請の問題も含めて、今後更に検討すべき事柄であろう。

### ③ 宗費の国用と武装的商船の造立

田中智学は、宗費の一部を国用をたすける為のものとし、国威光揚・皇恩敬謝の宗門的行事として、武装的商船の造立を提唱している。すなわち、平時は海上伝道と宗門の交通便利を図るが、国家有事の際には国を守る為にこの武装商船を国家の用に供するといふもので、それが日蓮主義の説く慈善事業であると決めつけ、「軍艦を造りて仏事を行ずるは、安国論の密契、『涅槃経』の洪範なり」と述べているのである。

しかしこのような武装的商船や軍艦造立の構想は、軍国主義の色彩甚だ濃く、今日の平和憲法の理念からしても、当然否定されるべきものである。

しかも軍艦を造つて仏事を行じることが、どうして『立正安国論』の密契であり、『涅槃経』の洪範であると言うのか、理解し難いところである。宗祖は、『立正安国論』の中で、謗法の者に対しては、ただ「其の施を止む」ことを述べられ、たとえ正法を護る場合でも、武装を肯定してはおられない。また『涅槃経』の経文にある、正法を護る者は刀剣・器仗を執持すべしとの教えが、現実に軍艦を造立して、国家の武装に協力することを説いているのではないことも明白である。

### ④ 宗教的慈善事業と社会的慈善事業について

今述べたことに関連するが、日蓮主義による慈善事業は、「国家の根本を養いて、邪を摧き、正を護る」ことであり、具体的には、今触れた「軍艦を造りて仏事を行ずる」ことであるというが、これを日蓮主義といい、宗教的慈善事業と主張する根拠はどこにあるのだろうか。これをもって宗教的慈善事業とするならば、いわば宗教の戦争に対す

る加担としか映らないだろう。

しかしもう一方の「彼の孤児を拾い貧民を賑わし、もって善を樂しむごときは、社会的慈善にして、宗教的慈善にあらず、人としてなすべきものにして、宗門としてなすべきものにあらず」という指摘はどうか。

近年、国内では福祉活動やボランティア活動が叫ばれ、海外ではインドシナ難民やアフリカ飢餓の救済活動が叫ばれて、宗門でもその対応が求められている。しかし、これらの活動は、ここで言う社会的慈善事業ではあっても、宗門として行なうべき事業ではない、ということになるのだろうか……。現代における宗教的慈善事業とは何かを、改めて考えさせられる指摘と言える。

##### ⑤ 「今の僧は、古の優婆塞なり」について

田中智学は、末法時代における僧の大部分は出家としての資格は失ってしまい、優婆塞として考えるべきであると提案している。そう定めてしまうならば、妻帯制度も末法的であり、妙宗であって、僧侶の妻帯についても何ら問題はないとしている。

田中智学は一度出家した後、還俗した身であるからこのような意見も唱えやすいかもしれないが、末法に生きる我々日蓮宗僧侶は、果してそう簡単に出家者としての意識と自負心を放棄して、優婆塞になりきってよいのだろうか。例えば、今年一月に九十九歳の法寿を全うして遷化した、日本山妙法寺の藤井日達山主は、こうした立場とは逆に、現代において出家主義を貫き、玄題を世界に広め、仏舍利塔を内外に建立して平和運動に身を捧げた出家僧である。まさにその姿勢は対照的と言えるが、我々にとっても現代における出家とは何か、自らの身に当てて考えねばならない問題である。

以上、本書を読んで我々の側から見た問題点を幾つか取り上げてみた。時代の隔たりがあるので一概に論ずること

は出来ないが、これらの他にもまだ問題点はあるだろう。例えば、前述した「宇内万邦靈的統一軍」の表現や、日本を世界の中心のように捉える世界観等、後に国家主義・国体学へと傾斜していった田中智学の姿勢は、本書の文底にも窮われ、そのような危険な思想は、我々にとって看過出来ない問題である。

また当時問題となっていた本山制のあり方や、信徒から徴収する宗税の案など、特に制度に関する具体的な改革案の中には、問題視すべき点もあると思うが、ここで留めておくことにする。

## 五、まとめ——我々の課題——

さて、今回の一連の研究例会で、この『宗門之維新』を取り上げた目的は、言うまでもなく、田中智学が提唱したこの革新的な宗門改革論を謙虚に学び、それを通して彼の活動と目的の一端を知ることであった。

だがもう一つの狙いは、単に本書を明治時代の書物として読むばかりではなく、本書を現代に読むことであった。すなわち本書を読んだ上で、現代に生きる我々僧侶や、今日の宗門が考えるべき内容はどこにあるのか、我々や宗門に対して投げかけている課題は何かを読み取ることであった。

これまで、本書の内容紹介にはじまり、田中智学が提起した問題点、更に我々から見た本書の問題点等を書き連ねてきたが、そうした中で我々が考えねばならない問題や、我々の課題を、ここで整理してまとめたい。

まず最初に考えねばならないことは、今から八十余年前、田中智学が宗門に向けて唱えた提言や投げかけた課題に対して、それ以降今日までの宗門史の中で、果してどれ程宗門は実行し応えてきたか、あるいはそれ以上のものを残してきたかということである。

勿論、これに対する答は容易に出せるものではないし、多角的な視野から考えて答えねばならないものだろう。し



かし彼が指摘した当時の宗門の諸問題の中には、そのまま今日の課題とすべき内容が多く見られた。例えば、信仰心についてみても、今日多く見られる御先祖供養やご利益信仰ばかりでなく、清新活気の信仰心、すなわち日蓮聖人の教義に則した「不惜身命」の信仰心はあるのか、果してそれを僧俗にわたって根付かせるにはどうしたらよいか。彼が「侵略的態度」と唱えた折伏（主義）を現代にどう捉え、社会の中で如何に実践していくのか、これらの二点は、今日でも重要な問題として把握されるだろう。

また御本尊勧請の雑多、教義・行軌の雑乱等の指摘は、どう統一していくかという点で考えねばならない。「僧別分班」という、いわば僧侶の役割分化の提言をはじめ、信徒の「分限」の規定や「宗門戸籍」の設定等、制度上の改革を中心とした数々の提案は、問題視するばかりでなく、今後活現しうるものはないか、検討してみることも必要であり、宗教的慈善事業のあり方も、まさに現代の課題である。

更に、こうした改革論を踏まえた上で、田中智学がここで説く進歩的態度や、復古的態度という立場から、今日の宗門の制度や組織、教育や布教の方法が、時代や社会状況、そして我々の生活様式に適應しているものかどうかを点検し、また寺院・僧侶・信徒のあるべき姿はどうなのか、と検討してみることも必要である。

こうしてみると、田中智学が本書の中で掲げた問題の幾つかは、時代は移り、社会状況は変化しても、今もって宗門や我々僧侶に対して今日の課題として投げかけられていると言うことが出来よう。今後、こうした課題を一つ一つ受けとめて、祖願達成に向けて取り組んでいく姿勢が望まれるところである。

さて、本書を読んでみて、改革論の内容については、幾多の問題点が見られたし、表現上の問題や、時代の変遷もあつて、現代には不適當であり許容されない点も目についた。その反面、今日の宗門にとつても、検討すべき課題を見い出すことも出来た。

しかしそれらはおいておくとしても、今からおよそ一世紀近く前にあつて、当時の仏教界や宗門の実情を鋭く分析、解明し、「不惜身命の心地」から日蓮主義を宣揚して、時代に応えうる宗門の改革を唱え、それを試みた田中智学の情熱と精神は、高く評価し、学び取らねばならないものである。

但し、田中智学がその生涯の中で、日露戦争の頃を境として国家主義・国体学へと傾斜していったその波紋は、今日にまでわたり、そうした思想が、現代では一般に拒絶され、田中智学全体の評価をマイナスにしている面があることも否めないところだが、彼をどう評価するかは別として、我々は、彼の全体像と日蓮主義の運動が門下教団に与えた影響を適確に把握して、彼の掲げた理想や運動の目的を知っておく必要があると考えるのである。

今や日蓮宗は、宗徒総弘通を提唱しながらも、その一方、宗祖第七百遠忌以降の宗門のあり方や具体的なビジョンを模索している過程にあると言えよう。こうした時期にあつて、改めて本書を読むことは、宗門の行く手に何らかの示唆を与えるものと思われた。

本書が執筆された翌年、すなわち明治三十五年は立教開宗六百五十年という記念すべき年であつた。その時期に田中智学が本書を通して新たな宗門の夜明けを提唱した様に、我々は来るべき二〇〇二年の開宗七百五十年を目指して、新たな宗門改革の第一歩を踏み出さねばならないことを痛感するのである。現代の宗門の維新が俟たれるところである。